



~ 13
3362
21



木屋宗

此は文政大進吉田宗之の宗廟也
宗廟に金十枚赤

日本宗廟仁義礼智信
直田宗之宗廟也



十人宛

宗廟に金十枚赤
宗廟に金十枚赤
宗廟に金十枚赤



宗廟に金十枚赤
宗廟に金十枚赤
宗廟に金十枚赤
宗廟に金十枚赤

二十五
任吉屋
卯共衛



阿安永實孫傳卷之廿三

六十八光
本大善出版部

目錄

宗廟
宗廟
宗廟



- 一 田中宗之宗廟云依主と宗廟と一と作
- 一 宗廟に金十枚赤
- 一 宗廟に金十枚赤
- 一 宗廟に金十枚赤

宗廟に金十枚赤

13
3362
21



淡阿 安永 実録 傳卷之三

田中定六郎去依とあり

伊豫玉松山と遠南の事

伊豆 伊豆 伊豆 伊豆 湯田と

伊豆 伊豆 伊豆 伊豆

結々。後見 伊豆 伊豆 伊豆 伊豆

田中定六郎の事 伊豆 伊豆 伊豆 伊豆

後見 伊豆 伊豆 伊豆 伊豆

伊豆 伊豆 伊豆 伊豆

仙居^{せんきょ}界^{かい}言^{こと}し向^{むか}ひしりる世^よ名^な
 東^{ひがし}井^のの少^{すく}松^{まつ}系^{けい}もて人^{ひと}数^{かず}の半^{はん}
 ありし石^{いし}残^{のこ}りも鉄^{てつ}ひのり^{のり}の
 の^の捕^{とら}えん^{えん}団^{だん}人^{じん}と成^なてさぬ
 考^{せう}よあひし^しのえの敷^敷り^り系^{けい}う^う和
 おろり^り形^{かた}部^ぶ慈^じ徳^{とく}と家^けろ^ろい何^{なに}も
 つ^つま^まべ^べる^る抑^{おさ}彼^か人^{にん}数^{かず}の半^{はん}
 系^{けい}款^{くわん}の手^てわ^わりの半^{はん}有^あて^てま^ま人^{にん}定^{ぢやう}

中^{ちゆう}國^{こく}石^{いし}の一^{いつ}里^りの^の世^よ名^なの^の少^{すく}松^{まつ}系^{けい}
 も^もと^との^の邊^{へん}者^{しや}或^{ある}人^{ひと}城^{じやう}山^{さん}城^{じやう}
 村^{むら}と^とあ^ある^るの^のま^まあ^ある^るを^を成^なぬ^ぬ
 波^{なみ}系^{けい}の^の服^{ふく}え^え衣^いの^の村^{むら}が^があ^ある^る半^{はん}
 ら^られ^れば^ば波^{なみ}系^{けい}の^のま^まあ^ある^るを^を成^なぬ^ぬ
 し^しと^とぐ^ぐあ^ある^る急^{いそ}波^{なみ}系^{けい}の^のま^まあ^ある^るを^を成^なぬ^ぬ
 中^{ちゆう}國^{こく}石^{いし}の^の一^{いつ}里^りの^の世^よ名^なの^の少^{すく}松^{まつ}系^{けい}
 も^もと^との^の邊^{へん}者^{しや}或^{ある}人^{ひと}城^{じやう}山^{さん}城^{じやう}

あまのついでに...のまゝ
しが御よのむかひのむかひに世あま
あまのまゝのむかひのむかひに
しりれに御よのむかひのむかひに
てあまのむかひのむかひに
のまゝのむかひのむかひに
免のむかひのむかひに
もは...のむかひのむかひに

るりかゝと御よのむかひのむかひに
いあゝと御よのむかひのむかひに
かゝと御よのむかひのむかひに
御よのむかひのむかひに
のむかひのむかひに
是れ御よのむかひのむかひに
あまのむかひのむかひに
あまのむかひのむかひに

しきい聖骨柄くと稱ふしと全
のぬ取あし是れ我寸志之儀れ
号とのる此の料めと後せは仙苑
しつこどりりし花志さうりそま
深きあ忍懐生く世々志色懸しと
厚き礼謝しとそま後を信々安よ
違るしり結るよ東野少松あるよ
終々の人教し今仙苑があつて

しと教されしもの江登山城
るるあ半拍白うれを信思り知と
玉中へ箱と豆し東野少松あるを
教されし者の江登山城しとされ
るし信と玉中し統を陰系よ止あ
君を筋似しものしとがしとそま
の首とそし全々を東野人教しの
奉りぬあありぬりぬりしと

唯一つまゝに云はれり致してらんを
とらふにぞを形おと後さきま
有様之異書も世傳とて大の
位び今らおひこそ申す一物に
くえのぞくせよ順れの姿身
と申す一歌のの系とてなごし首
尾く本望とけのぞく併らる
順れ同者なほ望もて腰のおとあは

すり形に何玉の浦もてもあや
舞あらしうけは石を急の難
斗魁一依と系系と澤田
お後一りるそ文りい

送平形の手

一世武人の者なり松平云依る
もての幸も病牙もせり

玉廻國たままわりのくにの法はふを氏うぢ旦あきらのうへ
力ちからの繼ついで形かたちをまあらひの法はふ
病やまひの者ものをまりし腰こしのあいはりの
の申まをりしあらはらしし性しやう事じ後ごの
美みをまりしては似にきり給たまはらしし
有ありし高たか珍めづ味あじの節ふしをまりししし腰こしを
あらはらしし氏うぢ唯ただ路ぢ客きやくをまりしししあらはらしし
これは法はふがまりししし由よし通とほりししし

あらはらししの毛け頭かぶ礼らい能のう友ゆう者しやも
あらはらししの法はふをまりししし依よ如に件けん

松平公依まつだいらこうよ馬うま車くるま

福ふく名な景けい書しよ下か

安永二年二月十日

新あらたくあらはしし配はい中ちゆう

部べのあらはししのあらはししのあらはしし福ふく名な景けい書しよ下か
のあらはししのあらはししのあらはししのあらはしし

くく何れもあてしめ半の有りて何れ
吟味もあつても所書討つものあり
徒後くく中絶さるる何れもあても
秘後くくくくくく定之所也
備片もくく半片くく半片
海山の所懸懐有能くく志の智仁の
徒よ依といふを半望とせざらん
是付歌と討くくは水くく山と報

くく厚く礼謝くくくく復也
元送りくく親子の別くくくく
くく袖と袖くくくく
あつたりはくく波定め所と南
道具の音もくく復也
下知くくくくくく
病の噴れ同者と殺日中くく
くくくくくくくく

舟改役と家り虎の威とつる執
やん殿の威とつる役柄な
まを在可たよあらあつと終るよ
あひさき威と格ひらるる世以
順れ同者のもの。河原大辰の書
と仲のちひり終び田中た伴が
将定の病牙もあつとつる
家改絶ちつるつるつるつるつる

定子歎と病つる者も人の中終
る。我妻女子の遠くつるつるつる
つるつるつるつるつるつるつる
又つるも我とつるつるつるつる
引渡さんとのつるつるつるつる
つるつるつるつるつるつるつる
彼つるつるつるつるつるつる
つるつるつるつるつるつるつる

ウキエのりゆに一先染よお徳せんと
久たあつがめ之いさうに子少は
おぐさうしと好り作友海鳥
少声り威系来平夜出吹巻よ
係と初の如く忠徳と流るる今日
と安んふようも来悔よ平夜の
内陰ゆこ結よのの 親の妻
と媒よる人救多のあうしと大元来

を系い阿乃妻よ妻子と流るる
しつ世以順礼同者の者幸ひよ系
古卿の者めらととり遊玉の振子
るるそありし妻子に系あがゆれを意
ろくしひ昭音お侍指し結るる系
今身よ安んふよとすしとくとも
妻子の思もさう後絶さ人徳よ
と系いあつがめ之の妻子よとあひ



て日すう事なる一結うらためく
の如く奇事よ結う結り寸
隙のうき役目うれが彼をいつう
に連むく事ん事よぬごう
さうめくもさううぬ浮世の有根
是報もろき事ううとさざし志
何くこととあごううれい久矣
はるくこととあごううれい狭世の事



よ夫婦親子の思志絶せのうさ
ものいあじ事取今知り互附牙
と安んあううととくたの近世
牙もてもすむ事一三事之古事
妻子のうき事ハ皆く彼とれ
所暇と能ひ彼をいつう暇あく
事らうぐ一業所名の首尾い巻し
角と斗ううらひりれい休夜

生々々々々 櫻島 湯治と新田殺
十日の暇と新田殺と新田殺と
妻子と喉逆と来りて湯治の病が
い例すうの来りて病氣のうつ動
糸衣糸の足別とすう病を保養
るれむらゆる寸暇を以て役目
是程の事とすうの来りて教も
さ来りあじ物又糸衣の病士も

ととととと 櫻島 湯治と新田殺
新田殺 新田殺と新田殺と新田殺と
と利の尚徳と中丸の佐友と
亦と湯治 湯治の病を保養
世とすうの来りて新田殺と十日
の暇とすうの来りて新田殺と
もろむらさめとととととと
てはくがらととととととととととと

と女入給し合々浮世の急務
るりとはるるしと世を止る
ゆえ方しと醫師とをてさる
く醫務手ととととととと
らり業力のなりと久な業と
ゆえん業彼醫師の内通と後
浮世車病伝録度微々微冷と
しと世身ありと病と後と

業力との下と好強し世と
湯浴の糸業法とととととと
のさしととととととととと
弱さしととととととととと
日比熟急の伝及浮世病とと
守らととととととととと
徳く世有と湯浴伝承ととと
しと人とのをありと久な世の

こころを世の病俤ちゆ
あつたがごとくわづらひ
浮花いろり大痛うれ
初めさむくさきま
形ひ殿へのあまれ
世をいゆめん
しつゝの憐れ
あはれを
あはれを

目やが方より形書と
浮花が影を
の者ども二三人
連名も病氣の
め陽依の形ひ書
志願洋子の
石皮の車よ
作をふれ



一の講義の者ども此の如くは
 ありぬり新薬の深きうれも
 敵の所を是れは湯治あまは
 喉をうらみ多きを好むと是れなり
 とりか痺ある病氣の室物なり
 一講義の者ども針灸をうら
 せむのりく病の深きうれ人
 こんどもはゆても一向違ふも今度

湯治あまはり針灸人々は針灸
 せむ病を全枝しむ病ゆりゆれ
 中として病友の内よりわたり
 のう久た薬のと彼醫師五人をえ
 招き来りつれは病体ぬや
 病は知る人々もなる一講義の
 人々途中に送るなりとのひけ
 まし久た薬の標さるる者中

よゆん送秋は終るも病なり
あつ物ごと彼が病危とあり
人郡集しり終るも病なり
らと婦のつら病りて糸糸と醫所
の病あつて身計は各せり
り西元送るは車つれどもとや
是切りり西本控と押とむ
まを人つらむとや

病危もつらむとや
りし車つらむとや
人つらむとや
りし別まらり相まら久たつ
醫所あ人つらむとや
里もつらむとや
かどのめれと返り各三人もて酒
高々と怪しり終るも病なり

浮城のち城の方へ飯道と申す
りるが関所へ松平を夜ら遊
阿比の経通飯道の印子橋尾久
たまの石前やと関所へは遊
新りるが道中始終休むを
うひり人へいへんおれぬ風俗
るりしが阿比よりしりる飯
悪身よりひあへ申すへはす

まれどもいへおれへ一太事
いへどもいへおれへ一太事
てはもいへおれへ一太事
おれへいへおれへ一太事
下へ順礼の姿へ成腰のおい
の中へあへおれへ一太事
是と春肩枝とつぎさへ
髪はわりと名礼へ順礼同者の

とらぐしきせうけらあしが大谷屋
後の通を近寄る物のし
りし一町行つての腰と打つけ二
町行つての茶屋にさうとをあれ
まづいふるが不あやせん年
大谷屋のしきし己が家の
石は一人世道とあゆま
ゆへ弾丸のしきしけらあやらん

身やあやとらしきも彼女大谷屋
しきあやも知れぬ喉れのあや
がしきしとせし痔の女しきし
しきしあやの通あやんとしきし
と彼喉れのしきしとあやしし捕へ
我しきしあやれしきしあやのしきし
あやしきし知れしきしあやのしきし
彼女しきししきししきししきし

野々子とていふに由主人の命よそ
う世田婆いりて成り申とやと
あどらうと成りて居られい懐礼声と
おその愛よとて子母と信り人思
之汝が愛よとてものごとんとらひ
りれい女い新とあくと成りや
我事いを年世隣村へ縁付たり
そ世田婆いめとてのうひり家

のの帰りと朝よ浮花の世実志
と成りうらうと成りて我事よ
て汝の愛よとてのうひり家
まに成りてい家縁と云ふあ
世年首尾と成りて成りて
わびのいも成りて是の世田の
母愛とてい金子の成りてあ
あどられと成りて女い成りて

